

海のゾミアとして倭寇をみる

川戸 貴史

一 参加に至る経緯

筆者は日本中世史を専門としており、主な研究テーマは貨幣流通である。ゾミアをテーマとしたワークショップに筆者が報告者として参加することは、どう考えても似つかわしくない。しかし縁あって私を報告者として推薦していただくことになり、日本中世史研究を紹介する役割を担うという意図をもって参加を決断するに至った。

企画側は日本史への関心が高いとも伺った。このことは、(日本語ネイティブ研究者による)日本中世史研究の海外でのアピール不足に起因するのであろう。筆者もその責を免れないのだが、今回の参加によって少しでも「罪滅ぼし」

ができると思ひ、英語にはまったく自信が無いのだが、参加することにした次第である。

ワークショップ「中世のゾミア…グローバルな中世における国家なき空間」(Medieval Zonias: Stateless Spaces in the Global Middle Ages)は、二〇一九年二月八日と九日の二日間、英国オックスフォード大学にて開催された。筆者は初日に報告の機会を与えられ、質疑応答を含めて三〇分程度の報告を行った。依頼を受けた当初からなるべく具体的に事例を紹介するように求められたと記憶していたので、理論的な議論を促すよりは、紹介した事例がゾミアとしてふさわしいかどうかという議論を喚起することを目指した。

報告のテーマはどうすべきか。「脱国家」としてのゾミアという課題を前にして、日本中世史においていかなる題材がふさわしいかを考えた。筆者が特に専門とする一六世紀の場合、一向一揆や惣国一揆など、既存の権力に対峙した集団がまず浮かんだ。日本中世史の伝統的テーマとしてよい民衆史の観点からも、好適な題材だろう。しかし、ほとんど前提となる知識を持たない多くの参加者を前にして話すことを考えると、少ない報告時間と拙い筆者の英語では、このテーマでは十分な報告をすることが困難であろうと思に至った。

そこで思い当たったのは、一四世紀後半の倭寇である。元々ゾミアは山岳地帯の人々を捉えて構築された概念であるが、海をフィールドとして国家の枠組を超える人々という視点は斬新で、関心を呼ぶのではないかと考えたのである（しかし、当然ながら海をテーマにするという発想はむしろ平凡で、海を移動する人々を扱った報告がほかにもあったのだが）。脱国家という視点で倭寇を叙述した代表的な先行研究もすでにあり「村井一九九三、田中二〇一二など」、直截専門とはしなくとも、筆者自身長らく関心を寄せていた。その結果、報告のテーマは倭寇に決定した。次節において報告の概要を示す。

二 「海のゾミア」としての倭寇—報告概要

（一）境界人としての倭寇

倭寇は東アジア沿岸域で活動した海賊を指す言葉であり、一四世紀から一六世紀にかけて朝鮮半島や中国沿岸部を頻繁に襲撃した集団である。倭寇は船団を率いて輸送船を襲撃したり、沿岸部での略奪行為を働いたりする集団であったが、過激化して徐々に内陸部でも略奪行為を行うようになっていった。倭寇という言葉は日本側の文献で見られないが、中国・朝鮮の文献に頻繁に表れる「村井一九九三、関二〇〇二、田中二〇一二など」。

倭寇が過激化した時期は、大きく分けて二つある。前者は一四世紀後半に主に朝鮮半島を襲撃した倭寇（前期倭寇）、後者は一六世紀半ばに中国沿岸部を襲撃した倭寇（後期倭寇）である。諸文献では、倭寇の構成員を日本人とみなすが、実際のエスニシティは日本に限らず、東シナ海の海域を生活圏とする漁民などの住民や、あるいはこの海域を交易圏とした密貿易集団も含まれていた。それゆえ、倭寇の構成員を「日本」かどうかという現代的な国家的範疇に措定することは適切ではない。実際には、朝鮮半島や中国、あるいは東南アジアなどから往来した人々や、あるいはモンゴル時代に移住したアジア北方出身の人々も関わっ

海のゾミアとして倭寇をみる（川戸）

ていたと考えるべきである。このことについて、村井章介は、倭寇はマージナルな人々であったと主張する[村井一九九三]。

（2）一四世紀の倭寇

本報告では、時間的制約のため前期倭寇についてのみ取り上げる。倭寇の活動が活発化したのは一三五〇年以後とされ、以後毎年のように倭寇は朝鮮半島の沿岸を荒らすようになった。倭寇が略奪の対象としたのは、主に次の二つである。一つは米穀である。租粟を収める漕倉とそれを運搬する漕船がまず攻撃の目標になった。二つには朝鮮半島の住民であり、主に沿岸の住民が略奪対象になった。捕虜にされた高麗人は日本に拉致されただけでなく、遠く琉球まで転売されることもあった。高麗は日本に対して、倭寇の鎮圧とともに捕虜になった高麗人の送還を度々要求していた。

倭寇が発生した原因の一つには、日本の政治情勢が関わっている。一三三三年に鎌倉幕府が滅亡し、日本列島は内乱に陥った。特に九州は南北朝の対立が膠着したため、農業生産性の低い北西沿岸部では、困窮した住民が略奪に手を染めるようになった。こうして海賊集団と化した倭寇には、徐々に様々な出自を持つ周辺海域の人々が加わるよ

うになった。朝鮮半島のほかにも、倭寇は王朝交代で混乱していた中国沿岸部も襲撃した。一三六八年に成立した明朝は度々日本に対して倭寇鎮圧を要求したが、九州の政治情勢は依然として不安定であったため、鎮圧は進まなかった。しかし一三七〇年代の日本で内乱が徐々に収束すると、室町幕府の統治下のもと九州での倭寇討伐が効果を見せ始めたようだ。

一三九二年に高麗に代わって朝鮮王朝が成立すると、朝鮮は日本（幕府やその影響下にある九州の有力勢力）との外交を頻繁に行って倭寇鎮圧を強く要求するとともに、国防体制を整備した。一方で、倭寇を懐柔する政策も採用した。たとえば、平和的な貿易を行おうとする者はそれを認め、貿易を行うための居住区を三浦（富山浦・塩浦・乃而浦）に設置した。それが奏功して多くの倭寇は朝鮮に投降し、彼らはその後日本や琉球と朝鮮との交易に従事するようになる。中国においても一五世紀初頭の内乱が収束して明朝の統治が安定化すると、海禁政策によって沿岸警備が整備された。こうして、東シナ海における倭寇の略奪行為は徐々に沈静化していった。

（3）倭寇の多様性

倭寇の構成員は、日本の対馬や九州北西部沿岸地域（松

浦)・五島列島において漁業や廻船に従事する住民が多かった。それに加えて、朝鮮半島に暮らす禾尺・才人といわれた人々も略奪に加わっていた事例がある。たとえば、一三八三年に交州江陵道の禾尺・才人らが倭賊と詐つて、平昌・原州・榮州・順興・横川等で略奪を行ったという(『高麗史』禡王九年「一三八三」六月条)。禾尺は、牛馬の牧畜や皮革の加工、柳器の製作などに従事した集団である。

才人は、仮面芝居や軽業を職とした集団であり、朝鮮半島において伝統的に蔑視されていた人々であった。このほか、朝鮮半島南東部の巨済島に居住していた人々(日本出身者も含む)もまた、倭寇に加わることもあった。一三六九年に倭寇が寧州・温水・礼山・沔州の漕船を襲撃したが、この時襲撃を行った倭寇の中に、高麗が巨済島への居住を許した「倭人」が含まれていた(『高麗史』恭愍王一八年「二三六九」一二月戊午条)。

済州(耽羅)に居住していた馬の生産者もまた、倭寇に関わっていた可能性がある。というのも、倭寇は陸地では馬を使って移動していたのだが、その馬の供給地である済州が拠点の一つだった可能性があるからである。モンゴルが済州を支配していた時代に、「韃靼牧胡」と呼ばれるモンゴル人からなる馬の生産業者が済州に移住していた。彼らは、倭寇の最盛期である一三七四年に、高麗に対して反

乱を起こしたことがあった。この反乱と倭寇との関係は文献に明記されていないが、関係のあった可能性が想定されている「高橋一九八七」。そうであれば、倭寇は実に多様なエスニシティで構成されていたことになるだろう。

三 ワークショップに参加して

多くの聴衆は倭寇についての詳細な知識を持っていなかったようであり、具体的な経緯についての質問は多くはなかったが、報告後に何人かの参加者から内容に興味を抱いた旨の感想を受けた。ごくごく小さな貢献ではあったが、一定の成果はあったと思いたい。

ワークショップ全体の感想としては、筆者のように具体的な事例を紹介する報告はほかにもあったが、全体的にはゾミアの持つ理論的枠組を問はず趣旨の報告が多く、それをめぐる議論で盛り上がった印象が残った。筆者も大いに示唆を得たが、実は世界各地のゾミアに類する事例について具体的な知見を得ることを期待していたこともあり、積極的に議論に参加することはできなかった。それは、ひとえに筆者が各地の歴史に関する知識が不足していたことに加え、英語の能力の問題も大きかった。中世のゾミアをめぐる議論は今後も推進される予定のようであり、いかに

海のゾミアとして倭寇をみる（川戸）

展開するかを期待したい。

筆者に限ったことかもしれないが、ゾミアというテーマで日本中世史を考えるということは、日本中世史研究のみに集中しているとなかなか出会えない視点だったかもしれない。それを考えると、他地域を専門とする研究者との交流を積極的に行う意義の大きさに改めて思い至る機会となった。今回の経験を奇貨として、筆者自身もできうる限りそのような場が構築できるよう取り組んでいきたい。今回の機会を与えてくださった関係者のみなさんに御礼申し上げます。

参考文献

- 関周一『中世日朝海域史の研究』（吉川弘文館、二〇〇二年）
高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流」（『名古屋大学文学部研究論集・史学』九八、一九八七年）
田中健夫『倭寇―海の歴史』（講談社、二〇一二年、初出一九八二年）
村井章介『中世倭人伝』（岩波書店、一九九三年）
（千葉経済大学経済学部准教授）